

雨月物語
春雨物語
世間子息氣
東海道中膝栗毛
浮世床



日本文学全集 13

雨 月 物 語

春 雨 物 語

世間子息氣質

東海道中膝栗毛

浮 世 床

河出書房新社

日本文学全集 13 雨月物語他

© 1956

編集委員

青野季吉 荒 正人
川端康成 瀬沼茂樹
中島健蔵

装 幀 者
原 弘

N D C

昭和 36 年 6 月 5 日初版印刷

昭和 36 年 6 月 10 日初版発行

定 価 290円

訳者代表 円 地 文 子
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 中 内 佐 光
印 刷 曉 印 刷 株 式 会 社
製 本 新 宿 加 藤 製 本 工 場
本文用紙 王子製紙工業株式会社
同 納 入 株式会社大和屋洋紙店
クローズ 日本クロス工業株式会社
同 納 入 株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区 株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291)3721~7

振替口座 東 京 10802

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

雨月物語	三
春雨物語	七
世間子息氣質	二三
東海道中膝栗毛	二六
浮世床	四九
注釈	四七
略歴	四九
解説	四九
池田弥三郎	四七
麻生磯次	四九
安藤鶴夫	四九

雨
月
物
語

円 上
地 田
文 秋
子 成
訳 作

卷の一

白峯……………	三
菊花の約……………	九

卷の二

浅茅が宿……………	一七
夢応の鯉魚……………	二五

卷の三

仏法僧……………	二九
吉備津の釜……………	三三

卷の四

蛇性の姪……………	四三
-----------	----

卷の五

青頭巾……………	五九
貧福論……………	六四

卷の一

白 峯

逢坂の関を越えてから秋立つ山の紅葉も見すがたは、浜千鳥の足あとを踏んで行く鳴海瀉の砂浜、富士の高嶺の雪、浮島ヶ原、清見ヶ関、大磯小磯の浦々、紫草の咲きにおう武蔵野の原、塩竈の朝風ぎの景色、象潟の漁夫のあばら屋、佐野の舟梁、木曾の棧橋と行くさきさき心ひかれぬ眺めとでもないのに、なおも西の国の名所古跡をさぐるうと、仁安三年の秋は霞の花散る難波を経て、須磨明石の浦吹く風を身にしみつつ、旅寝の日を重ねかさねて、讃岐の国真尾坂の森かげにしばらく杖をとどめた。それすらはるばる辿って来た旅の疲れを休めようとの心ではなく、ひたすら仏道修行のために結んだ草庵であった。この里の近くに新院（崇徳院）の御陵があるという。松柏は奥深く茂りあって、青空に白雲のたなびく晴れた日さえ、絶えず小雨がそぼ降るようである。

稚児ヶ岳という峻しい峰がうしろにそぼ立ち、千仞の谷底から雲霧が湧きのぼると、一瞬に目の前さえ、見えわかれぬおぼつかなさで閉ざされてしまう。木立ちのほんのわずかに空いているところに、土をややたく盛り上げた上に石を三重に積み重ねたのが、荆棘蔓木にうずもれて、見るだにうらかなしい。これこそはおん墓であろうと心もまっ暗になって、さらに、夢うつつとも思われない。さてもこの目に昔正しく見たてまつったのは、紫宸殿、清凉殿の高御座にあって政を聴きたもう端厳なお姿であった。百僚百官はおん前にひれ伏して、聖天子よと詔を恐れ畏んで仕えまつっていた。

近衛院（近衛天皇）に帝位を譲りたもうた後とても、みやびやかな仙洞御所にいらせられて豊かに余生をすごしたもうはずのものを、鹿や猪のかよう足あとばかり著しく見えてともらいもうすものとてもない深山の本草の荒れしげる下にむなしく玉体をうずめたもうとは、昔を知るもののだれ一人夢にも思ひかけようぞ。一天万乗の君主と仰がれたもうおん身も、前世から宿業というものは恐ろしやおん身につきまよってついにこのような不幸な終わりをとげたもうたのであったかと浮世のはかなさを思いつづけるにつけても、涙は泉のように滾々と湧きでてつきないのであった。せめて夜一夜供養しまいらせようとおん墓の前の平らな石の上に座をしめて、経文

を徐かに唱えつづける間に一首の歌をよんでたてまつた。

松山の浪のけしきは変らじを

かたなく君はなりまさりけり

(松山の海の波のありさまは、昔も今も変わりますまいに、あなたさまはむなしくなっておしまいになりましたか)

なおも心をゆるめず読経しつづけた。夜露はしとどに法衣の袖を濡らす。日の没も果てたあと、人跡絶えた深山の夜気は惻々と身に迫ってきた。石の床に茵のように散りしいた木の葉、その底冷たさに精神は澄みわたり骨肉は冷えに冷え、言いようもなく凄じい心地である。月はすでにのぼっているらしいが、深く生い茂った木立ちの下には微かな光さえ漏れてこないで、真の闇に押し詰められてわが身は盲目のごとく思わずつうつと眠るともないのに、正しく円位円位とわが名を呼ぶ声を聞いた。

目をみひらいて透かし見ると、ふしぎや背高く瘦せ衰えた異形の人が目の前に立っている。顔かたち、着たものの色綾も見えずぶきみなのを、西行はもとより不退転の道心に鍛えられた法師のこととて恐ろしいとも思わ

ず、
「なんんなればここへは来たもうぞ」

と問うた。

かの異形の人は答えていう。

「さきにそちのよんだ歌に返歌しようとして、姿をあらわした」

松山の浪にながれて来し船の

やがてむなしくなりにけるかな

(松山の波にうちよせられた船のようにここまで流されてきた自分はついにこの地で生命を終わった)

「うれしくもたずね参ったぞ」と仰せられるのを聞いて、はじめて新院の死霊と知った。西行は地にひれ伏し、涙を流してもうし上げた。

「なんとして、こうまで迷わせたもうか。濁世を去りたもうことのうらやましさにこそ、今宵、かくは供養したてまつるものを……現世のままのおん姿をあらわしたもうとはありがたくも、おいたわしいみ心にぞんじます。ひとすじにこの世のことはいっさい忘れたもうて、永劫不変の仏の位にのぼりたまえ」

熱誠こめて諫めたてまつる言葉を聞いて、新院は空を仰いでからからと笑いたもうた。

「そちは知るまい。ちかごろ世に兵乱のつづくは朕がなす業じゃ。世にあったころから魔道に志を傾けて平治の乱を起こした。死んでの後はいよいよ朝廷に祟をなすぞ。見よ見よ、やがてまた天下に大戦乱が起ころうぞ」

西行はこの詔にあきれて涙さえかわき、

「これはまたあさましいおん仰せをうけたまわるものかな。陛下はもとより聡明の聞こえ高くましますことゆえ、王者の道については詳しく御承知あそばされましよう。こころみにおたずねも申し上げましよう。そもそも保元の御謀反は天の神の教えたもう理に叶ったものとして思い立ちたもうか。または御自身の私欲から謀らせたもうか。明白に仰せられませ」とはばかりなくもうし上げた。

その時院は怒りたもうおん声あららかに、「西行うけたまわれ、天皇の位は人界の極である。もし人道を上につくものから乱す時は、天の命するところ、民の望みにしたがって、無道の君主を伐つ習いである。そもそも永治の昔、犯した罪もないに父帝の仰せにしたがい、三歳の体仁（近衛天皇）に位を譲ったわが心、人欲深しとはよもうまい。体仁が若くして崩御された後は、わが皇子重仁こそ国を治めるべきものと朕も人も思つたにはこと違ひ、美福門院の嫉妬にさまたげられて四ノ宮の雅仁（後白河天皇）に帝位を奪われたのこそ、深い怨恨となつたにむりがあろうか。重仁は国を治める才がある、雅仁になんの器量があろうぞ。天下の大事を定めるに人の徳を選ばず、後宮の寵姫に相談されるのは、正しく父帝の過誤というべきである。それでも父君の世

にありたもうあいだは孝行の信をつくしてゆめゆめ不平を色にもあらわさなかつたが、崩御の後はいつまでこうしていられようかと帝位簒奪をくわだてたのじゃ。臣として主君を伐つさえ、天理に叶い国民の望むところならば、周八百年の國家の基を築き得たものを、まして朕はもとより帝位にあつたものの、女性が政治に嚙み入るさかさまな世に取って代わろうとするのを無道とはいひ得まい。そちは家を捨てて仏道にふけり、未來の業苦のがれようとす。詮ずるところ利欲の心から人道を因果の理にひき入れ、古來の聖賢の教えを仏教にまぜいれて小ざかしくも朕に説教するか」と叱りたもうた。

西行はいよいよ恐れる色もなく膝をすすめ、

「陛下の仰せは、人道の理を仮りて実は醜い私欲を離れてはいらせられませぬ。遠く唐土をいうにおよばず、わが朝の昔、応仁天皇、兄の皇子大鶴鷄の王をおいて弟王菟道の王を皇太子に定めたもうた。しかるに天皇崩御の後、兄弟相譲つて帝位につきたまわず、三年を経てまきまらぬので、菟道の王子は深くこれを憂ひ、われ久しく生きて天下の民を煩わしめようかとみずから壽命を断つて終わられたので、やむなくおん兄の皇子がみ位につかせられた。これこそ天道を重んじ孝悌をまもり、眞実をつくして私の欲がありませぬ、まことに堯舜の道ともう

すべきです。日本で儒教を尊んで帝王の道を行なう輔にするのは、菟道の王は百済の王仁を召して漢籍を学ばれたのが初めともうしますから、この兄弟の皇子のみ心こそ、すなわち唐土の聖賢のみ心でありましょう。また周のはじめ「武王一度怒りて天下の民を安くす、民として君を殺すというべからず、仁を賊み義を賊む一夫の紂を誅するなり」という言葉が孟子という書物にあると人のいうのを聞きました。唐土の書物は經典、歴史書、詩文に至るまで渡来せぬものともありませんに、かの孟子の書だけは日本に渡りませぬ、それはなぜというのに、わが国は天照大神の開闢以来、天皇の血統の絶えることがない国柄でありますのに、このような理論專一の口がしこい教えを伝えたならば、末の世には天皇の位を奪つて罪なしという悪人も出てくるであらう、と八百八柱の神々が惡みたもうて、神風を起こしてこの書物を載せて来る船を覆したもう由です。されば他国の聖賢の教えも、わが国土にふさわしからぬこともすくなくあります。また詩経にも歌っているではございせんか。「兄弟牆にせめぐとも外の侮りをふせげよ」と、しかるに骨肉の愛情を忘れたまいあまつさえ一ノ院（鳥羽上皇）が崩御あそばされて殯宮にみ肌膚もまだ冷え果てぬかと思ふうちに、はやはたさしものを靡かせ、弓刀をふりまわして帝位を争いたもうは、不孝の罪のこれより重

いものはございますまい。天下は神の定めたもう器であります。たとえ重仁親王の御即位は万民の仰ぎ望むところでありましょうとも、徳を布き親和の道を施したまわずして無法に世を乱そうとあそばしても、昨日まで陛下を慕っていたものも、今日はたちまち怨敵となつて、御本意を遂げさせられぬばかりか、古今にためしもない遠流の罪を得たまい、このような片田舎に果てたもうたのでございます。ただただ旧怨を忘れたまい、浄土に帰りましたもうことこそ願わしゅうぞんじます」

新院、吐息を深くつかせたまい、「今となつて事のもとを正してわが罪を問う、そちの言いぶんにも理はないとはいわぬ。しかしかにせんこの島に流竄の身となつて、高遠の松山の家に幽閉され、日に三度の食膳を捧げるのはかは、そば近く仕えるものさえない。ただ空行く雁の声がひとりねの夜半の枕に聞こえれば、都へ行くのであらうかとそぞろになつかしく、暁の砂浜に千鳥の群立つ羽音もいたずらに傷心の種となる。かくては鳥の頭は白くなるとも、都にかえるおりはありようもない、さだめしこの荒れた海辺に孤独の中に生を終わることであらうと思ひ諦めて、ひたすら後世のためにと、五部の大乘經を書写した。しかし、せつかく写経したものを人をもまれに鐘の音さえ聞こえぬ荒磯

にむざむざとどめておくのもあまりに悲しい、せめては筆のあとばかりは都の中に入れたまえと、仁和寺の御室のもとに、写経に添えてこの歌を送った。

浜千鳥あとは都に通へども

身は松山に音をのみぞなく

(浜千鳥の足あとのような文字だけは都に行けるけれども、わが身は遠い松山に都が恋しくしのび泣いてゐる)

しかるに少納言信西が、もし、この写経に呪詛の心でも籠っているはよろしくないときかしらにも進言したことによつて、そのままわが写経は送りかえされて来た。昔から唐土にも日本にも国を争つて兄弟仇敵となる例は珍しからぬことであるが、静かに考えれば罪深いことであると悟つたればこそ悪心懺悔のためにと精神をこめて写したお経であるのに、いかにさまたげるものがあればとて、近親を責めるは慎重にせよとある法の条文にもよらず、わが筆のあとさえゆるし入れたまわぬ天皇の心こそと、今はもはや兄弟ではなく永恒の讐敵である。かくなるうえはこの経を魔道に捧げてあくまでこの恨みを晴らしてのけようとひとすじに思い定め、わが指を噛みきりその血をもつて願文を書き、五部の大乘経とともに、この前の志戸の海深く沈めて後は人にも会わず深く閉じこもつて、ただ魔王になることのみを大願として誓つて

いたが、さてこそ見よ、平治の乱が起こつたではないか。まず信頼が高位高官を望む増長慢の心を誘つて、義朝を味方につけさせた。この義朝こそにくい敵である。

父の為義をはじめ兄弟の武士はみなわが為に生命を捨てたのに、かれ一人はわれにそむいた。為朝が勇猛の働き、為義忠政の戦略に一時勝色を見せたものを、たちまち西南の風にあおられて焼討ちされ、白川殿を出てから如意ヶ岳の峻しい山路に足を傷つけたり、あるいは木こりの刈りとつた椎や柴を身にかついで、雨露を凌いだり、果てはとらわれてこの島に流されるまで、みなあの義朝の執念深い計略にくるしめられたのである。この報いには虎狼のごとき野心にそそのかされて、信頼の陰謀に一味させるようにし向けたので、人道にさからう罪、戦略に鋭くない清盛に敗北することとなつた。父為義を斬首した報いはわが身にもせまつて、わが家臣の手にむざむざ殺されたのは天道の祟と知れ、また少納言信西はつねに博学を銜つて人を納れぬ心の正しからぬ奴である。これをおびき出して、信頼、義朝の敵にまわしたので、ついに家を捨てて宇治山にまで穴を掘つて逃げかくれたのにとりとう探し出されて六条河原に梟首にされた。これこそわが写経を都に入れず帰した讒言の応報を見せたのである。わが憤怒のあまりは応保の夏は美福門院の命を奪い、長寛の春は関白忠通をとり殺して、朕もこの秋世

を去ったが、なお瞋恚の焰のさかんに燃えしきるほどに、ついに大魔王となつて三百余類の惡魔の巨魁になつた。わが眷屬の事とするは、人の福を見ればこれに移して禍に転じ、世の治まるのを見ればかならず戦乱を起こそうと謀る。ただ清盛の命運が強大で、親族縁邊ごとく高位高官につらなり、わがまま勝手に國政をとっているが、嫡子重盛が忠義をもつて輔佐しているので、障礙の時がこない。見よ、平家とて久しくはあるまい。雅仁の朕につらかつたほどの報いはかならず受けるであらうぞ」

とおん声はいよいよ恐ろしく響き渡つた。

「陛下はかくも魔界の惡業に沈みぬいて、今は仏の国土と億万里を隔てていらせられるもの……もう何ももうしますまい」

と西行は言つてただ黙然と對座していた。

時に峰谷ゆれ動いて、疾風は木立ちを倒すがごとく、土塊小礫を空に巻き上げる。みるみる一だんの鬼火が新院のおん膝の下から燃え上がつて、山も谷もまひるのごとく明らかに見え渡る。光の中にはじめてしげしげ院の御様子を見たとまつると、朱をそいだおん顔にくしけずらぬみ髪がおどろに膝まで乱れ、白い眼のまなじりはつり上がつて熱い息をくるしげについていらせられる。御衣は柿色の古びすすけたのを召して手足の爪は獸のご

とく長くのび、さながら魔王の形相、あさましくも凄じ

い。

空に向かつて、

「相模、相模」

とお召しになる。

あつと答えて、鳶のようなあやしい鳥が羽ばたき來た

つておん前にひれ伏し、詔を待つ。院はこの化鳥に向か

いたまい、

「なぜはやく重盛の命を奪つて雅仁、清盛をくるしめな

いか」

と仰せられると、化鳥は答えて言う。

「上皇の福運はいまだつきておりません。重盛の忠義信

義もちよつと近よりかねます。今から十二年を待てば重

盛の寿命はつきましよう。彼が死ねば平家一族の幸いも

この時に亡びましよう」

院は手をうって笑いたまい、

「さればよ、かの仇敵どもをことごとくこの前の海に葬

りつくすぞ」

とおん声は谷峰に響いて凄じさは言葉に絶した。

西行は魔道のあさましい光景を眼前に見て涙しのびが

たく、ふたたび一首の歌に、仏道帰依の心を進めたてま

つた。

よしや君昔の玉の床とても

かからんのちは何にかはせん

(たとえ昔の帝王のつかせられた高御座だとして、御寿命のつきた今はなんにもならないではございませんか)

帝位も乞食もいっさい無差平等とあるものを、と心あまつて高らかに歌い上げた。この歌を聞こし召して感動あそばされたようであつたが、だんだんお顔色もやわらぎ、鬼火もすこしずつうすらいで消えてゆくうちに、ついにお姿もかき消すように見えなくなつて、かの化鳥もどこへ行つたかあとかたもなく、十日あまりの月は峰にかくれて、木の下闇の色も見えわかぬ深さ、まるで夢の中にさまよっているようである。

ほどなくしのめの光がさしそめた。明けゆく空に、朝の小鳥の声々おもしろく鳴きかわすのを聞きながら、かさねて金剛經一卷を供養したてまつり、山をくだつて庵に帰つたが、静かにひとりその夜一夜のことを思い出してみると、平治の乱からはじめて、世の人々の上に出こつたことなど、すべて年月まで一つとして違つていないので、深く慎しんで人にも語らなかつた。

その後十三年を経て、治承三年、平重盛が病いを得て世を去つたのち、平相国清盛が後白河法皇をうらんで鳥羽離宮に幽閉したり、またかさねて福原のそまつな御所にお移ししてくるしめたてまつつた。

頼朝は東風の競い起るごとく関東に旗上げし、義仲は北国の雪を凌いで都へ攻めのぼつて来た。平家の一門はことごとく西国の海上に漂泊し、ついに讃岐の海、志戸八島まで落ちのびて、勇武ならびない将兵も多く海魚の餌となり、ついには赤間が関壇ノ浦においつめられて、幼き天子は入水され、武將たちも残りなく亡び果てたまで、あのおりの新院のお言葉につゆばかりも違わなかつたという。まことに恐ろしくもあやししい語りぐさである。その後、御陵は、社殿みごとに彫刻をほどこし、色美しく彩色して新院の御霊を崇めたてまつつた。かの国(讃岐)に行きかようなほどの人はかならず、幣帛を捧げて参詣する神となつたのである。

菊花の約

春の柳のみどりが青々と色美しいからといって庭へ植えるものではないように、軽薄な人と親交を結べば悔いが多い。柳の葉は夏のあいだうとうといまで生い茂るけれども、秋の初風が吹きそめれば脆くも散りはじめである。軽薄な人は親しくなるのも早く離れ去ることも速いである。それでも柳はまた春がくれば新たにみどりを萌やすけれども、軽薄な人は一度交わり絶えてはまた訪れる日とてもない。

播磨の国、加古の宿に丈部左門という学者があつた。

清貧にあまんじて、嗜んで学ぶ書物のほかには住居を飾りたてることなど煩わしがって、いっさいかまわない。

母が一人あるが、この人も孟子の母にも恥じない賢婦人で、つねに機を織り綿を紡いでたつきに換え、左門の学問に専心する志を助けていた。左門の妹は同じ里の佐用という家に養われていた。佐用家は豪家であったが、丈部母子の奥ゆかしい人柄を慕って娘を娶って親族となつたほどなので、何にかこつけて物を贈つて来るけれども、母子は衣食のことにひとの迷惑をかけてはすまぬと辞して受けなかった。

ある日、左門は同じ村の知人のもとを訪れて、昔今のさまざまな物語をはじめて興に入っている時、壁を隔てた隣の間で人の苦しむ声があわれに聞こえるので、怪しんでたずねた。主人の言うには、

「ここよりも西国の人らしいのですが、連れにおくれたとのことで一夜の宿を求められたのです。見たところ歴とした侍らしくりっぱな人柄なので、とめてあげたところ、その夜から、高熱を發して起き伏しも自由にできぬ容態になってしまいました。気の毒なので三日五日とこうして置いてあるのですが、どの人ともまるでわからないのにこんなことになって、うっかり宿をしたのがとんだことになってしまい、ほとほと困っているのです」と語った。

左門は聞いていくたびもうなずき、

「さてさて悲しいことを聞くものかな、貴殿の不安心に思われるのもわりからぬことです。が、病氣の人は知るべもない旅の空に病みわずらって、どれほど心細くたよりないことであらう。ちょっと見舞つてあげましょう」と言つて立つのを、主人は押しとどめて、

「熱病はうつるものと聞きます。子どもにいたるまであの部屋には出入りさせません。あなたもそばへよつてまぢがいがあるといけません」と言つた。

左門はにっこり笑つて、

「死生はおのずから天命によるといいます。なんの病氣がうつりましようぞ。そんな理のない言いつたえは、私どもは意に介しませぬ」

とさわやかに言いきつて、その部屋にはいった。

見ると病人は主人の言葉にたがわず、なるほどひとかどの武士らしい風采であるが、いかにも病氣が重いとみえて顔は黄色く萎えしぼみ、皮膚は黒く瘦せ皺んで、古い布団の上にもだえ苦しんでいる。

人なつかしげに左門を見て、

「湯一つちょうだいいたしたい」という。左門は近くさしよつて、

「客人、心配なざるな。かならずお救いもうしますぞ」

と世にもたのもしくいった。そのあと主人と相談して、薬を選び匙かげんしてみずから煎じて与えながら、一方には粥をすすめて、まめまめしく看病すること、まるで兄弟のようで心底から見捨てがたい情深さに見えた。かの武士も左門の真情の深さに涙を流して、

「こんなにも漂泊の旅人につくしてくださるありがたいさ、某死すともこの御恩を報わずには置きませぬ」と言った。左門はたしなめて、

「死ぬなどといくじないことを仰せあるな、およそ疫病は日数をきるものです。その期間をすぎれば命に障ることはありません。私が毎日まいってお世話いたしましたう」

と誠実に約束して、熱心に看病したので、病氣もすこしずつ軽くなってやがて気分も清々しくなった。

客はこの家の主人にもていねいに礼をのべたが、何よりも左門の真実溢れる慈悲深さを尊んで、その職業をたずねるついでに、自分の身の上をも隠さず語り出した。

「某はもと出雲の国松江の村に成長して、赤穴宗右衛門と呼ばれる者です。ふつつかながら兵学をいささか学び得たかどで、富田の城主塩谷掃部介殿が私を師として学問されました。しかるに近江の佐々木氏綱殿に密々の使命をもつてかの館へまいりそこに滞るうち、さきの富田城主尼子経久が山中党を味方とし大晦日の夜、急に城

を乗りとったので、掃部介殿も討死されました。もとより出雲の国は佐々木家の所領で塩谷は守護代のことですから、三沢や三刀屋らを援護して経久を滅ぼしたまえと再々すすめてみましたが、氏綱は見かけは剛気に見えて内心怯懦な愚将なので私の意見を用いず、かえって私を自分の家来にしようとはどめるので、理由もなくなんでここにおろうかと、ひそかにぬけ出して国へ帰る途中、この熱病になやまされて思いかげずも貴所のお世話になり、身にあまるお恵みにあずかりました。この御恩には某、後半生の生命をもつてかならず報いましょう」

「何をおっしゃるか、眼前の危急をみすがたいのは人情です。御ていねいすぎる御挨拶は痛み入ります。なおなお逗留なさって御養生なさい」

と真実みえて言う左門の言葉をたよりに、日をすごすうちに何かにつけて二人は親しくなりまされた。

左門はよい友を得たと思つてしじゅう交わつて物語りに時をうつすのであったが、赤穴も和漢の書物にあることをぼつぼつ語り出て、問いつ問われつするうちに赤穴は究理の念に富んでいて、ことに兵法の理を説く言葉はすぐれて聞かれた。何を話してもたがいにつとして意にたがうところがないので感じあいよろこびあつて、とうとう兄弟の盟をするにいたつた。

赤穴は五歳の年上なので兄となることになった。そこ

で左門にむかつて言うには、

「私は父母に別れすでに久しい。おん身の母上はすなわち自分にも母であるから、母子の礼をとってお目通りしたいと思うが、母上は私の子どもらしい願いを聞いてくださるであらうか」

左門はよろこびに堪えず、

「母はつねに私に兄弟のないことを苦にしています。兄上の真心あるお言葉を聞いたなら、生命の延びるほどよろこびましょうに」

といって、連れ立って家へ帰った。

老母はよろこび迎えて、

「倅は才足らず、学んだことも時に遇わないうで出世の望みもむなしゅうございます。どうぞ、あなたはあれをいつまでも捨てず兄としてお教えくださいまし」

赤穴は左門の母にうやうやしく礼して言った。

「すぐれた男は義を第一といたします。功名を馳せ富貴に暮らすなどは末のことです。私も不遇な武士ですが、今慈愛深い母上をいただき、左門殿のような君子から兄の礼をうけるとはなんとという果報ものでしょう」ところからよろこびあつて、またここに日をすごした。

昨日今日咲き出たと見えた峰の桜も散りはてて、涼しい風に、鏈のよるのはいわでも夏の来たことを語ってい

る。そのころになつて赤穴は左門の母子にむかつて、

「私が近江をのがれて来たのも出雲の様子を見ようためたつたのですから、ともかく一度出雲へ行つてすぐ帰つて来ましょう。そのうえで今度こそ身を粉にしてお二人につかえ御恩に報いましょう、しばらくの別れをゆるしてください」

と言った。

「それはごもっともですが、しかし兄上、お国へ行かれていったいいつ帰られるのですか、私はいかにも待ち遠しい」

と左門が言うと、赤穴は顔色をあらためて、

「月日は逝きやすいものだ。おそくともこの秋にはかならず帰りましょう」

「秋はいつの日を定めて待ちましょう。お願いです、兄上、日をきめてください」

「さよう、それでは九月九日の菊の節句を帰る日ときめましょう」

「兄上、かならずその日をまちがえないでください。一枝の菊の花に田舎酒を用意して、お待ちもうしますぞ」二人はかたく誓いあつてから、赤穴は西のほうへ去つて行つた。

待つ月日は早くたつて行つて、茱萸の下枝にはやくも赤い実がほの見え、垣根の野ら菊もにのいやかに咲き出

て、九月になった。左門は九日の日はいつもより早く起き出て、飾りもない家の畳を掃ききよめ、黄菊白菊二枝三枝を小瓶にさした。さて、財布を空にして酒さかなをと整えるのを見て、老母は諷めていった。

「あの出雲というところは山陰道の果てにあって、こことは百里も隔たっているということゆえ、いくら約束は約束でもかならず今日こられるかどうかはわからない。顔を見てから支度をしてもおそくはあるまいに……」

「赤穴は信義を守る武士ですから、かならず約束をたがえはしません。顔を見てからあわただしく支度などしては、心の浅さを見すかされてはずかしい」

左門は言つてよい酒を買い、新しい魚を料理して、台所に客を待つ用事をととのえた。

さてその日は、一天晴れわたって千里の果てまで雲一つ見えず、つぎつぎに家の前をすぎ行く旅人の群の語を聞けば、今日はだれそれがよい都入りをするぞ、こんどの商売物によい儲けをするさいさきだなどと言いがら行く。また五十をすぎた武士が同じような出立ちの二十歳ばかりの連れの武士に、日和はこんなによかったのに明石から船に乗っていたら、この朝風ぎに牛窓の港へは漕ぎよせていたろうに若いもののくせに臆病風に誘われて陸路を来て錢を多くつかうことよと、ぶつぶつ言うのに若いほうは答えて、いつか殿さまが御上落のおり

小豆島から室津のあいだの船路で海があれでずいぶんえらい目にお会いなされたとお供のものの話していたのを思えば、内海の船旅はやっぱり恐ろしい、まあ文句を仰せられずとまじりましょう。魚ヶ橋の蕎麦でも馳走いたしますときげんをとって歩いて行く。馬の口をとる馬子が腹立たしそうに、この死に馬め、目もあけていぬのかと、荷をのせた鞍をおしなおして追って行く。

午後のひかげもやや傾いて来たが、待つ人はこない。西に沈む陽を見て宿りをいそぐ旅人の足のせわしげなのを見るにも、外のほうばかり気になって心はまるで酒に酔っているようである。

老母は左門を呼んで、かの人の心は秋空のように変わるはずはないが、菊の色濃く匂うのは今日の節句ばかりとは限らない。帰って来る真心に変わりがなければ、時雨の降る秋の末になろうとも恨むことはあるまい。内へはいってお休み、明日を待とうではないかというのをむげにもいなきにくくて、とかく言いまぎらして母をさきに寝させてしまったが、なおもしやと戸を押しあけて外に出て見ると、空には銀河の影消え消えに氷のような半月がわが一人立つ影を照らして寂しい。門を守る犬の吠える声は遠くすみわたり、磯うつ波の音も自分のほうへばかりうちよせてくるようである。月の光も山の端にかくれてくらくなつたので、今はもう諦めようと戸をしめ